韓国済州島における城邑集落の構成について

風水思想からみた集住空間に関する研究 その1

A STUDY ON THE COMPOSITION OF FOLK HOUSES AND VILLAGE
OF SEONG YUP IN CHEJU ISLAND OF KOREA

The spatial composition of folk houses and village on Feng-Sui thought Part 1

朴 賛 弼*, 山田水城**, 古川修文***

Chanpil PARK, Mizuki YAMADA and Nobuhisa HURUKAWA

This paper is the investigation for Seong Yup village and folk houses in Cheju island. The purpose of this study is to find out the some characteristics concerning spatial composition for the Feng-Sui thought. The summary is as follows :

1)The village has been built up by two axes under influence of the Feng-Sui thought. 2)There are two center points by two center axes. It is a point for functional constitution, and one more point has a ratio of geometric constitution. 3)Folk houses built up by a position relation of a main building and a gate. And, it was to add to the mark of the Feng-Sui when decided an arrangement house. Accordingly, the rule gave luck and bad luck. We are understood that there was a apportionment 75% at a position of luck. 4)There is the south, south-south-eastern direction of the house that is a apportionment 74% in the village. This orientation is toward main mountain of Feng-Sui . Therupon the folk house can to receive insolation and sunshine equally a day from day. 5)Spatial compositions of the village and folk houses were influenced the Feng-Sui thought in the history of the past. It was connected with the natural environment and culture in the period.

Keywords : Cheju island(Seng Yup),Feng-Sui ,orientation, arrangement,axes, function, geometry,environment

済州島(城邑)、風水、方位、配置、軸、機能、幾何学、環境

1. はじめに

風水の本質は、人々がいかにして理想的な集住空間を追求するべきかということにある。対象は都市、集落、家屋、寺院、王宮、陵墓などの多方面にわたっている。風水は近年、諸学問分野で強い興味が示されている。地理学、歴史学、文化人類学、宗教学の視点からかなり詳細に風水の研究が行われている。しかし、建築分野での風水に関する研究¹⁾はあるが、それらは風水の理念を論じることが主体であって、風水思想と建築の空間構成に関わる研究は数少ない。実際に集落、家屋を取り上げ、その空間構成を分析し、風水思想の理念との関係を明確にすることが必要である。その結果をふまえ、風水思想の建築的な空間構成の疑問点を明らかにし、さらに風水思想に対する合理的な部分を探り出すことが本研究の目的である。すなわち、①背山臨水、四神相応による集落形成の要因、②軸による集落の空間構成、③集落の形局と小宇宙空間、④風水の符号(八卦、陰陽など)による母屋の配置と門の関係、⑤風水思想からみた空間構成と居住環境との関係などを解明することである。

研究対象地域として韓国の済州島の城邑集落、民家を選定し(図1)、1995年12月及び1996年4月の2回にわたって現地調査を行った。1980年度に出された「城邑民俗村・保存及び育成基本計画」と1994年度に出された「城邑民俗集落総合整備計画」は、城邑集落

に対して風水説に関するものでは四神相応、背山臨水及び二つの形局について紹介している。しかし、それらについては存在だけ論じており、風水理念に基づく建築的な空間構成の分析は見当たらない。本研究は風水思想に関連する形而上学的な理論に基づき、形而下学的な具象としての建築的空間の構成を分析するという方法をとっている。

かつて済州島は「耽羅」という部族国家で形成されていたが、

図1 研究対象地域位置図

* 法政大学工学部建築学科 大学院生・工修

** 法政大学工学部建築学科 教授・工博

*** 法政大学工学部建築学科 講師・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Hosei Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Hosei Univ., Dr. Eng. Lecturer, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Hosei Univ., M. Eng.

1105年に高麗(918～1392)の支配を受けて「耽羅軍」になり、1211年に「済州」と言う名前に改称された。その時代に本土から風水が伝播されたと思われる。1423年城邑集落が形成されたのは朝鮮時代(1392～1910)であり、韓国では風水思想が体系的につかわれていた時期である。済州島の風水の基本は本土と同じであるが、細部は済州島の風土に合うように解釈していたと思われる。

2. 集落、住居における風水思想の位置づけ

過去の東アジア地域において、集落が形成され住居が建てられるためには風水の理念が関わっていたといわれている。その基本理念と構造を図2にまとめた。すなわち、自然の地形を利用し、適地を選定することが風水の根本的思想であって、集落を形成する場所として生理的、心理的に満足が得られる。集落、住居の周辺の地形が背山臨水、四神相応の形態であり、気が集中する穴や明堂²⁾が存在するのが条件である。その穴、明堂の所に集落、住居が配置される。住居の向き(坐向)と門との位置関係は陰陽五行、東西四宅などの法則により凶吉が決まってくる。風水は居住空間に対して凶を避け吉を求める心理的に欲求を満足させることを目的として自然環境を最大限に利用した。

図2 風水と集落、住居の関係図

3. 集落の構成

3-1 背山臨水、四神相応と軸

郭璞の「葬書」³⁾に“気は風に乘れば散り、水に隔てられれば止まる”。と書いてある。すなわち、気を集めて散らさず、気を運行させて留めるということが「藏風得水」⁴⁾の法である。このような法が成り立つためには「背山臨水」⁵⁾の地形を要する。城邑集落の背山臨水は北に瀛州山を背負い、集落の東から南に流れている川尾川を前面とする形態になっている。城邑集落の特徴は普段水が流れていない川を川と見做し⁶⁾、背山臨水の形態として捉えている。背山臨水と深い関係があるのは「四神相応」である。城邑集落の周辺の地形を風水の四神相応に合わせると図3になる。北の瀛州山は風水学上、主山(鎮山)に当たり、集落を構成する一番高い山である。東のボンジ峰、南山峰が外青龍、内青龍になり、西のモジ峰、ジャンザ峰がそれぞれ外白虎、内白虎になる。朝山は南南東にある達山

図3 城邑集落の地形と舟形局

峰に当たる。「城邑民俗集落総合整備計画(1994年)」の報告書によると案山は南山峰になっているが、背山臨水の軸⁷⁾によるもう一つの案山は南にあるゴンチョンイ小山になると思われる。その理由は以下の通りである。①風水では、主山と案山を結ぶ線は気が流れる軸である。したがって、その軸線上に明堂である集落が位置付けられる⁸⁾。この原則から城邑集落は瀛州山とゴンチョンイ小山の軸線上に置いてある。②集落における各住居の母屋の向きは案山、又は朝山を眺める方位が多い。城郭内の85軒の母屋の方位を調べた結果、ゴンチョンイ小山(南)の向きが36軒で42.3%、達山(南南東)の向きが27軒で31.7%である(表1)。③ゴンチョンイ小山

図4 城邑集落の四神相応と高低比

表1 各家屋の母屋の方位

方位	区域	軒数	%	合計
南	36	42.3	85	100
南南東	27	31.7		
東	6	7.1		
東南	7	8.2		
南東	2	2.3		
東	1	1.2		
北東	2	2.4		
北	2	2.4		
北西	2	2.4

図5 城邑集落の配置図 (1995年12月現在) (▲は家屋の前面を示す)

図6 將軍大座形局

図7 南北空間構成

は集落の標高より低い地形であるが(図4)、山という名を付けて一つの風水要素⁹⁾をつくっている。それによって主山と案山を結ぶ軸及び集落と朝山を結ぶ軸が集落の空間を構成する二つの軸になる。この二つの軸によって集落には二つの中心点が出る(図5)。

1) 中心点OとO'の位置の確定: 図5から中心点Oは、主山と案山を結ぶ線(背山臨水の軸)と東門～西門を結ぶ線の交点である。中心点O'は倚斗亭と南門(朝山)を結ぶ線と東門～西門を結ぶ線の交点からなる。東、西、南門は客の出入りの門であり、中心点O'は城郭内の中心である客舎の門になる。つまり、中心点O'は門が集中する点として行政的な機能を持つ。

2) 中心点O、O'の幾何学的な意味: 点Oから西門、南門、北の倚斗亭までは等距離になる(121m)。しかし、中心点Oから東門までの距離は171mであり、南門、西門までの距離の1.42倍になっていて $\sqrt{2}$ の黄金比に近い。また、中心点Oから北東の城郭の端までは196mあり、1:1.619倍になっていてフィボナッチの黄金比1.618に近い。 $\sqrt{2}$ の意味は、風水の天・地・人の思想からなると考えられる。図5に記入したように中心Oを一角とする正方形が作られ、 $\sqrt{2}$ はその対角線となり「天」に相当する。過去では対角線の寸法がよく使われた¹⁰⁾ことからこの $\sqrt{2}$ もその一つであると考えられる。また、1:1.618は5:8の近似値であるが、風水の5は五皇極といい、全ての道理の根本を意味し、8は太極から派生した八卦を意味する¹¹⁾。この構成比はいままで調査した集落の中で台湾の恒春県城と韓国の樂安邑城の構成比と同じである¹²⁾。この比は過去の城郭における集落の空間構成に適用した一つの要素として考えられる。この構成比による集落の形態は南北が短く、東西が長いことになる。それは、集落がほぼ南向きであるからこの形態は日照、日射に有利である。二つの中心軸により、集落における住居の settlement line¹³⁾も二つになる。すなわち、二つの settlement

lineは背山臨水の案山と朝山に向けた方向である(表1、図3参照)。このように風水思想の背山臨水の軸、四神相応は城邑集落の空間構成に重要な要素であると考えられる。

3-2. 形局と小宇宙空間

風水では気が集まるところ、すなわち穴および明堂を中心に、周辺の地形を動物、植物、物、人、文字、天体になぞらえることを形局という。このような形局は地形の形象とその中にある気を具象的に結びつけることから出発したという¹⁴⁾。すなわち、根本的な考え方は、見えない気は捕まえることが出来ない抽象的なことであり、その気を具体的な形象になぞらえることによって、気があるところを具象的に表現することだと思われる。したがって、形局論は風水を理解する一つの方法である。城邑は船形局、將軍大座形の二つの形局を持っている。將軍大座形は広い範囲から見て集落を中心に周辺の地形が將軍の座る場所の形態になぞらえられる(図6)。一方、見方を変えて集落の存在する位置は南の地形がやや狭小であり、完璧ではないが、盆地の形になっている。すなわち、当時、盆地は軍事的防衛上有利とされている。狭い範囲での形局から見ると盆地は船形局になる(図3)。南山峰が舵及び碇を表わし、集落の北西の高地帯が船首になり、船は北西を向いている¹⁵⁾。したがって、集落は船の中心部になり、集落中心の巨木が帆柱を意味している。なぜ、船形局が南の海の方ではなく北西の山の向きになったか、その根拠は不明であるが、集落周辺の地形の形態によるものと考えられる。つまり、図3から見ると北西と南東の山までの距離が長いことと、集落と一番近い南山峰が舟尾になるからである。集落のそばには川があり、夏の梅雨の時は洪水が起こりやすいからため船形局にふさわしいと思われる。このように形局はその時代の社会的側面や厳しい自然的環境に耐えるための象徴であり、心理的に安心感を

与える要素であったと思われる。城邑の空間構成は人間が両手を開いている形象になぞらえられていると言う¹⁶⁾。つまり、三つの門をつなぐ「T」字形の道路を中心に北の官衙（日館軒）が頭になり、中央の客舎が心臓、西にある郷校が肺になる。また、東門と西門をつなぐ道が両腕になり、南門につなぐ道が脚になる。このような集落の空間構成を一個の人間になぞらえることは風水の小宇宙的な考え方である（図7）。南北方向の空間構成は北側の高地帯に官衙などを配置した行政的空間（ここでは公空間と呼ぶ）、中央には教育機関や客舎が公共空間になり、低地帯の南には住居空間、すなわち私空間の民家が広い範囲で位置している。このような空間構成の特徴は主山からの緩やかな勾配を利用した地形に社会的にヒエラルキーの空間に結び付けていると思われる。風水の裨補¹⁷⁾としては城郭の三つの門の前にハルバンがある。この造形物は玄武岩で造られたおじいさんの形をしているが、その役割は境界、呪術宗教、守護神の機能を持つ。このハルバンの位置は本土の魔除けであるヘテ¹⁸⁾と違い、悪い方向を眺めるのではなく、各門の前で一對のハルバンが向き合って置かれている。

4. 住居の空間構成

4-1. 空間構成の概念

済州島の平面的空間構成の概念は風水思想の陰陽五行の調和である。図8のようにサンバン（板の間）を含めて右側（東）が男性を象徴する陽の空間になり、ジョンジ（台所）を含む左側（西）が女性を象徴する陰の空間になる。また、アンディ（後庭）が陰になり、母屋とマダン（前庭）が陽になる。住居内の穴、明堂の関係はサンバンが穴の位置になり、マダンが明堂の位置になる。このような穴、明堂の空間構成は先祖を祀ることによって先祖の気はマダンの陽の気に繋がり、家族はその気を受けるという意味を持つ（写真1）。済州島の伝統的な間取りは三つの神々の領域と関係がある。サンバンにはソングジュと言う水平、垂直の神が存在し、家全体を見守る家神となる。すなわち、住居の中心であり、聖の中心でもある。1995年12月に行った調査では76軒の内、約95%に当たる71軒がサンバンを持ち、そこでソングジュ神を祭る。一方、本土の樂安邑城ではマル（板の間）がある家は約22%で、城邑集落に比べてはるかに少ない¹⁹⁾。板の間のない家の場合にはアンバン（主人の部屋）で祭っている。このように済州島ではサンバンがオンドルより重要視されていることがわかる。これは済州島では本土より冬は暖か

写真1 高氏宅（図5の54番家屋）の空中写真、（風使用）

く、夏は多湿と猛暑で板の間が発達していたからと思われる。しかし、板の間は本土では扉がなく開放的であるが、済州島では風が強い為、扉をつくることによって閉鎖的になっているのが特徴である（図9）。ジョンジ（台所）には火の神であるジョワン神を祭る。城邑集落では75%の家が、台所は陰の空間に配置していることからみて陰の空間を守っていることがわかる。コパン（穀物を貯蔵する部屋）にはアンチルソンと言う穀物の神がいる。平面類型からみるとジョンジとコパンはサンバンを中心に反対側にあることが分かる。済州島では農業が厳しい地域であるため、出来るだけ穀物を火を使う所から離して保存していたことが分かる。穴と明堂を結ぶテッマルは外部、内部空間の中間性を持つ縁側である。機能的には室内に雨、風、日射が直接に当たるのを防いでいる。テッマルは韓国南部地方では発達しているにもかかわらず、城邑集落では、テッマルがある住居は48.7%であり、半分にも満たないことが特徴である。しかし、テッマルがないかわりに軒からサンバンまでムトゥンという約1m位の軒の深い空間がある。なぜテッマルが退化し、ムトゥンが発達したかはムトゥンが雨、風、日射に対応していることと、済州島では材木が貴重であり、テッマルが省略されたからと思われる。住居の進入空間構成ではオルレという曲がり道がある。これは、風水からみて直進してくる悪い気を回避することである。現実的に済州島は風が強い地域であるため、道を曲げることによって風を弱くすることになる。また、各住居のプライバシーの確保の機能を持っている。このため済州島の家屋の門は扉がある門は少なく、ジョンナンという三本の木を横に掛けることで、家の入口になっている。さらに、三本の木は家族の不在を告げるサイン性の機能も果たしている。

図8 平面構成の機能と神々の領域

図9 趙氏宅平面図（図5の84番家屋）

4-2 母屋と門の位置関係

風水用語として建物の位置や方向を決めることを「坐向を見る」と言う。すなわち、「坐」は建物が位置することで、「向」は建物の向きの方位を意味する。坐向論は母屋、門の位置や方位の関係を重要視する。坐向は周易の理論と関わりがあり、その中に建物の方位や位置を決める「東西四宅論」がある。この理論は陰陽五行の調和の要素とともに住居の母屋と門の位置関係の吉凶を判断する理論である²⁰⁾。調査対象の86軒の内、マダンの中心点が不確実な店舗の7軒を除いて79軒の母屋と門の関係を調査し、この理論が適用されていたかを分析してみた。

分析方法：敷地の中でマダンの中心点を基点にして南北の軸を基準に8方位に分ける。この8方位に八卦を適用し、東西四宅と陰陽を区分する(図10)。マダンの中心点から母屋と門の方位の相互関係を図10の東西四宅と陰陽関係に照合し、吉凶の割合を分析する。東西四宅の吉凶の判別は母屋と門が同じ東四宅、西四宅に位置すれば吉であり、離れると凶である。陰陽は母屋と大門が同じ陰、陽に位置すると凶、それぞれの陰陽の位置にあると吉である。79軒のうち母屋は坎(北)に位置する場合が多く、母屋に対する門の位置は巽(南東)、離(南)、震(東)が吉であり、それぞれ18軒、13軒、6軒、合計78.7%の家が該当する(表2)。中でも巽の位置を優先することがわかる。母屋と大門を直線上に置かないことを斜門と言い、直進してくる気を回避するために少し角度を変えている。しかし、約23%が門と母屋が直線上にあることは、上述のようにオルレという曲がり道があるからで、それほど不安ではなかったと思われる。母屋は乾、坎、艮の三つの方位だけで約85%を占めている一方、門は震、巽、離の方位で約70%占めている。これはここでは出来るだけマダンを南の位置に置いて使いたいからであ

図10 東西四宅、陰陽の構成と風向、風速図
(実線：風向図、点線：風速図)

表2 東西四宅と陰陽の構成に対する母屋と大門の関係

母屋 \ 大門	坎	艮	震	巽	離	坤	兌	乾	合計
坎				2			1		3
艮	2			1			6	3	12
震	6	1						2	9
巽	18	1					2	2	23
離	13								13
坤	6	3						6	15
兌	2	1						1	4
乾									
合計	47	6	0	3	0	0	9	14	79

■ 東西四宅又は陰陽に合わせた住宅の数(単位: 軒)・吉

□ 東西四宅又は陰陽に合わせなかった住宅の数・凶

る。その理由はここでは快晴日数が一年中79日²¹⁾しかないため十分な日照を受ける広い作業空間として使いたいからである。また、風の影響もあると思われる。最多風向の北を背にして母屋を配置し、風が少ない東から南までの位置に門を配置することによって、強い風を防ぎ、微風だけを住居内に入れようと計画しているものと考えられる。母屋の位置は坤、離、震にはない。この方位は冬は北東、夏は南西の強い季節風があり、この位置に母屋を配置することは不利である。

5. 風水の方位と太陽の高度

風水思想の影響とみられる住居の向きは、太陽の高度による日射、日照と関係があり、住居の軒の出の長さや床から軒の出までの長さに合理性が見られる。東から南の方位にある5軒の家屋を対象とし、夏季、冬季の太陽の高度による日射の長さを表3にまとめた。また、日射に対して各方位におけるそれぞれの住居の寸法の関係を表4、図11にまとめた。南向きの高氏宅の場合、日照は日の出から日没まで均等に得られるから一日中明るい。夏季に母屋の真正面における正午の日射の長さは33.3cmである。この家の軒の出の長さは66cmであるから十分に暑い日射を遮蔽することが出来る。しかし、午前11時以前と午後1時以後の時間帯の日射の長さは約66cm以上になるが、この場合はテッマルが105.9cmあり、軒の出との合計171.9cmになるため、日射がテッマルのわずかの部分にしか入らず、夏季での日射を避けることが出来る。冬季では午前9時から午後3時までの日射の長さが290.5cmから556.7cmまでであるから、サンバンや部屋の奥深い所まで十分な日射に恵まれて暖かい。南南東の趙氏宅の場合、夏の母屋の真正面に当たる午前11時の日射の長さは48.7cmであり、70cmの軒の出では十分である。また、午前9時から午後3時までの日射の長さは140.4cmの範囲になるが、軒の出とテッマルの長さが165.4cmあるため十分である。冬の午前9時から午後3時までの日射の長さは269.3cmから481.9cmまでで奥の部屋まで入り、十分な日射を受けることが出来る。南東の高氏宅、東南東の李氏宅、東の韓氏宅の場合、夏季に母屋の真正面に与える日射は軒の出の長さを越えている。しかし、東の韓氏宅を除いて他の家は軒の出とテッマルの合計の長には至らない。冬季では午前中は十分な日射を受けることができるが、午後からは日照が悪くなり、室温も南、南南東に比べて低下する。このように夏の日射に対しては工夫されているが、済州島では快晴日数が少ないため日照

表3 各方位の太陽の高度と日射の長さ(家屋番号は図5参照)

	午前8時	午前9時	午前10時	午前11時	正午	午後1時	午後2時	午後3時
6月 太陽の高度	37.0	49.5°	61.9°	73.5°	80.1°	73.5°	61.9°	49.5°
12月	9.45	18.8°	26.4°	31.4°	33.2°	31.4°	26.4°	18.8°
6月 日影の倍率	1.32643	0.853438	0.533238	0.295842	0.175066	0.295842	0.533238	0.853438
12月	6.00202	2.92978	2.01365	1.63691	1.52869	1.63691	2.01365	2.92978
6月 太陽の方位	84.25	-87.82	-77.12	-56.82	0	56.82	77.12	87.82
12月	-53.66	-43.27	-30.81	-16.15	0	16.15	30.81	43.27
6月 南・高氏宅	252.0cm	162.2cm	101.3cm	56.2cm	33.3cm	56.2cm	101.3cm	162.2cm
12月 82番家屋	1140.3cm	556.7cm	382.6cm	311.0cm	290.5cm	311.0cm	382.6cm	556.7cm
6月 南南東・趙氏宅	218.2cm	140.4cm	87.7cm	48.7cm	28.8cm	48.7cm	87.7cm	140.4cm
12月 84番家屋	987.3cm	481.9cm	331.2cm	269.3cm	251.5cm	269.3cm	331.2cm	481.9cm
6月 南東・高氏宅	235.3cm	153.6cm	96.0cm	53.3cm	31.5cm	53.3cm	96.0cm	153.6cm
12月 83番家屋	1065.3cm	527.4cm	362.5cm	294.6cm	275.2cm	294.6cm	362.5cm	527.4cm
6月 東南東・李氏宅	218.9cm	140.8cm	88.0cm	48.8cm	28.9cm	48.8cm	88.0cm	140.8cm
12月 81番家屋	990.3cm	483.4cm	332.3cm	270.1cm	252.2cm	270.1cm	332.3cm	483.4cm
6月 東・韓氏宅	235.3cm	151.5cm	94.6cm	52.5cm	31.1cm	52.5cm	94.6cm	151.5cm
12月 85番家屋	1065.3cm	520.0cm	357.4cm	290.6cm	271.3cm	290.6cm	357.4cm	520.0cm

からみると南、南南東の向きより不利である。南、南南東の向きは74%の家屋が占めている。この向きは第3章で述べた城邑集落における風水の主山と案山、朝山に気がつながる方向であり、集落が定着する settlement line にもなる。以上の結果から風水の方位は衛生学的、環境工学的に良い方位であると考えられる。

*注)
・点線は6月の日射 A: テッマルの長さ B: 軒の出の長さ
・実線は12月の日射 C: プンチェの長さ H: 床から軒までの長さ

図11 日射による断面関係(南・高氏宅の断面図)

表4 方位による各住居の寸法(単位: cm)

方位・家	A	B	C	A+B	A+B+C	H	建物の高さ
南・高氏家	105.9	66.0	110.0	171.9	281.9	190.0	485.7
南南東・趙氏家	95.4	70.0	112.6	165.4	278.0	164.5	395.1
南東・高氏家	89.4	68.8	×	158.2	×	177.5	446.8
東東南・李氏家	89.0	75.0	75.0	164.0	239.0	165.0	409.9
東・韓氏家	90.0	68.0	×	158.0	×	177.5	365.0

6. まとめ

本研究で得られた知見は次のとおりである。

- 1) 城邑集落は四神相応と背山臨水という風水の基本でつくられていたと思われる。風水の二つの形局を使うことによってその時代の社会的、自然的環境に対する心理的な安心感を与えたと思われる。又、城郭内の集落の空間構成は人間を素材として扱い、風水の小宇宙的思想を持つ形而上学的思考が強かったと思われる。
- 2) 集落は二つの中心軸により二つの中心点が出る。一つは機能的な構成のための点であり、もう一つは幾何学的な構成比を持つ点である。中心点と城門、城郭に対する比は $1:\sqrt{2}$ と $1:1.618$ になる。その比例は過去の東アジア地域によく使われた黄金比になり、 $1:1.618$ はフィボナッチ数列の黄金比になる。このような比は今までの調査した韓国の樂安邑城、台湾の恒春県城にも見られるものである。
- 3) 伝統民家の平面的概念は風水の陰陽思想を取り入れ、四方を陰陽に分割している。そのうえに、部屋の場所によって固有の信仰が混在している。サンバンは風水の穴であり、住居空間の軸になっている。
- 4) 住居の配置を決定する時は、主山と案山の軸及び倚斗亭と朝山の軸を重視して家屋の向きが決められたと思われる。その後、マダンを中心に母屋の位置と大門の関係を風水の符号を加えることによって心理的に吉、凶を与えられたと考えられる。
- 5) 城邑集落における住居の坐向は、日射、日照、通風に有利な方向になっており、住居の軒の出の長さや床から軒の出までの高さが適当になっている。以上のような城邑集落の集住空間構成は風水思想に基づいたことで、自然環境を合理的に利用したと考えられる。

すなわち、風水の基本は厳しい自然環境に対して自然の条件を最大に利用しながら、人々の繁栄を願い安全、快適な生活環境をつくり出すことを目的としたものであり、集落、住居の合理的な空間構成の演出方法であると思われる。

謝辞

現地調査に際しましては表善面の役所の方々と城邑集落の住民の皆様のご親切とご協力を頂き、大変お世話になりました。又、風を利用して空中写真を撮る時、色々お手伝いいただいた済州島ピアインテリア室長の李成雨氏にお世話になりました。ここに記し、厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 韓国では朴時翼氏の「風水地理説と建築計画に関する研究 1978 年、高麗大学修士論文」、「風水地理と現代建築、1992 年、技文堂」、日本の場合、李桓氏の「風水説における理念の考察、風水に関する計画学的基础研究、日本建築計画系論文集第 465 号、1994 年 11 月」、黄永融氏、本田昭一氏の「日本古代宮都の敷地選択と中軸線計画について、風水思想からみた古代宮都計画の研究、同第 474 号、1995 年 8 月」、張翠萍氏、北原理雄氏の「風水の別称からみた風水の原点と本質、同第 491 号、1997 年 1 月」などがある。
- 2) 風水では人間が住む所を陽宅、死者が住むところを陰宅といい、両者において気が最も集まる中心的な所を穴、穴の前面で生気を受けられる平らな場所を明堂という。
- 3) 「葬書」: 晋時代の郭璞 (A.D276~324 年) によって書かれた最古の風水書籍。
- 4) 人と自然環境の中で、人間にとって最も大切なのは空気と水である。「藏風得水」というのは良い風を蓄えて、良い水を得る方法であり、生活をより安全な状態に保つ意味である。
- 5) 穴や明堂は陰を背にし、陽を抱えて、後に山を背負い、前面に水を持つのが基本である。このような場所を背山面水、背山前水又は「背山臨水」と言い、吉地である。
- 6) 川尾川は地表面が透水性の強い玄武岩で形成されているので川の水は地下水になっている。
- 7) 集落の背後の山を主山とし、その主山から集落の前面に水があるところの方向の軸とする。すなわち、主山と案山を結ぶ軸であり、ある程度の幅がある。気をもっとも流れる軸であり、穴と明堂が存在することによって集落、住居が位置する。
- 8) 村山智順著、崔吉城訳、「朝鮮の風水」P119~120、民音社、1990、「天心十道証穴」の理論による。
- 9) 風水の完璧な地形を求めることが困難な場合、それぞれの地形、風土に適した風水要素をつくる事が出来る。例えば台湾の場合は住居の前面に池(風水池)を掘り、入口の両側に二本の木を植え(風水樹木)、背後の植林(風水林)など風水要素をつくっている。
- 10) ソンミン、韓国「の古造形意味」、技文堂、1990、p 31 ~ 33
- 11) ソンミン、韓国「の古造形意味」、技文堂、1990、p 57
- 12) 朴賛弼、山田水城、古川修文、風水思想から見た韓国・台湾の集住構成に関する研究、民俗建築学会誌第 108 号、1995 年 11 月、p 8
- 13) 集落における住居の母屋の向きが一番多い方位。
- 14) 金光彦、「風水地理」、デウン社、1993、p 24
- 村山智順の「朝鮮の風水 1931」には形局が約 175 種類載っているが、最近、金光彦の「風水地理 1993」では韓国だけで 266 種類の形局が紹介されている。
- 15) 城邑民俗集落総合整備計画、南済州島、1994、p .26
- 16) 金鴻植、韓国の民家第 2 巻 1992 年 p .712
- 17) 村山智順、崔吉城訳、朝鮮の風水、民音社、1990、p 235 ~ p 236、風水の条件が不足であれば風水要素をつくることを裨補といい風水に合う形態にした。
- 18) ヘテ：善悪の判断が出来る伝説の理想の動物、韓国国語辞典、1990
- 19) 朴賛弼、山田水城、古川修文、風水思想から見た韓国・台湾の集住構成に関する研究、民俗建築学会誌第 108 号、1995 年 11 月、p 13
- 20) 朴時翼、風水地理と現代建築、1992、技文堂、p 142
- 21) 南済州郡、南済州島統計年鑑、1993

(1996 年 6 月 10 日原稿受理、1997 年 2 月 25 日採用決定)